

わかば会誌

第21号

2024.1

巻頭言

梅花に想う



北谷クリニック 北谷 秀樹

新年明けましておめでとうございます。

時計の針が12時を跨いだ瞬間、世も心も新たになるのは何と不思議なことでしょうか！

会誌わかばの誌面を埋める命を受けましたのは、新年を言祝ぐ事とともに、昨春叙勲の榮に浴することが出来た事のご報告と御礼を言上するためであります。

新年と言えば、今を去る1300年の昔、天平2年、正月13日、大宰帥・大伴旅人は年始めの歌詠みの会を催しました。梅をお題とした世に謂う『梅花の宴』のことです。このとき詠まれた32首は万葉集（旅人の息子である大伴家持が編んだとされる）に収められておりますが、旅人はその巻頭にこのような一文を載せたのです。

初春の令月にして、気淑く風和ぎ、

梅は鏡前の粉を抜き、蘭は珮後の香を薫す

ご存じ令和の御代の由来です。『気淑く風和げかし』との願いとは裏腹に、これまでの令和の日々は、息をひそめて過ごすことを強いられました。王冠を身に着けた彼の病原体の出現によってであります。それにより我々医療者は大きな労力を費やし、犠牲も払いました。が、今になり、一歩下がって振り返ると、未知の病原体との闘いを通じて我々が得たものも決して少なくはありません。突然暗闇に放り出されたように先の見えぬ中で、生命を賭けた医療を行い、対策を練り、検査センターに出向き、療養施設を訪ね、ワクチン接種に勤しみ、当たり前のごとく日々の診療をこなす。即ち、すべての医療人が、それぞれの身の丈に合った任を黙々とこなす姿を、確かに見たのです。この体験こそ、災害の中で掘り当てた、宝物なのであります。これがこれからの医療に生きてこない訳がありませんし、活かすのが我々医療者の責務なのです。

さて、受章の顛末もお話ししなくてはなりません。令和5年4月29日に、図らずも春の叙勲の榮に浴することができました。旭日双光章の受章です。我が河北都市医師会では近くは山崎軍治先生、紺谷一浩先生と、誰もが認め

る河北都市医師会の柱石が受章されており、然もありませんと思うのです。が、自分の名をその後に連ねるとなると、些か尻込みするのであります。受章に相応しい格別の功績があったわけでもありません。強いて理由を探すとすれば医師会での職責を大過なく果たしてきたからでありましょう。それとて、自分一人で出来たわけもなく、有能な役員の諸氏を始めとし、全ての河北都市医師会会員の皆様が支えてくれたからであります。即ちこの度の受章は全ての河北都市医師会会員へのねぎらいなのであります。ここに思い至れば、少し肩の荷も降りようというものです。

とまれ皇居参内にも触れます。王冠を被った病原体に支配され、昨年までは受章者の参内は中断させられていました。しかし、何時までも王冠の威力に屈しているわけにはまいりません。遂に今回は受章者本人に限ってではあります。が、拝謁が許されることになり、坂下門をくぐる事になりました。雨上がりの五月晴れ、皇居の松林の緑が目にしみる日でした。厚労関係の受章者約300名は、皇居で最も大きな広間である豊明殿に整列し、お言葉をいただいたのであります。私の立ち位置は2列目で、幸い正面中央であり、間近にて拝謁することが出来、参内した甲斐もあろうというものです。

余談ですが、整列の静寂の中、侍従長に先導された陛下が豊明殿に入られたその刹那、バタンと大きな物音が起こりました。何事かと辺りを見回すと、誰かが倒れた様子。私は思わず「医者はいないのか・・・」と心で叫びましたが、咄嗟のことで、とても医者づらして自分が駆けつけることなどは思いもよりません。それは一人の受章者が転倒した音でした。緊張と感激の余りの失神だったのでしょうか？速やかな対応が成され、何事もなかったように式は進んだのでした。

加えて、昨年10月8日には、沖野会長、由雄前会長、久保副会長のお三方が発起人として祝賀会を催していただきました。多くの会員の皆様からご祝意、ご出席賜り、身に余るご厚情に改めて感謝申し上げます。河北都市医師会員であった僥倖を、改めてかみしめております。

本稿にお目通しいただけるのは、令和六年の初春なのでしょう。大伴旅人が今にしあれば、この梅花の季節をどのような思いで歌に込めるのでしょうか？本年が、皆様に、清くやわらかな初春の風の中、梅花の白さと蘭のほのかな香りを運んでくれる一年であることをお祈りします。